

北條政子

北條政子

北條秀司戲曲選集

青蛙房

北條秀司戯曲選集



書名 北條政子
著者 北條秀司
発行者 岡本経一

印刷 新光印刷工業株式会社
製本 株式会社 宮田製本所
製函 旬佐々木紙器製作所
用紙 十条製紙株式会社
表紙 日本クロス株式会社
装紙 特種製紙株式会社
発行 昭和四十八年一月五日
定価 一、五〇〇円

発行所 東京都文京区本郷二ノ一七ノ九
有限会社 青蛙房

電話東京(八二三)一五九七
振替東京七二三八四

北條政子

目次

北條政子

五

美しき落日

二七

和泉式部

一九

夜明け

三三

若き日の旅

二五

江戸紫

三五

百花園裏

三七

淫らな浜

三六九

雪しまき

四三五

女親分

四四一

後記

四五五

北條政子

八幕

初演の記録

昭和四十七年四月 歌舞伎座

照	音	舞	美	演
明	楽	踊	術	出
相	齋	尾	守	北
馬	藤	上	屋	條
清	政	菊	多々	秀
恒	雄	乃	志	司
	秋	里		
	風			

(主なる配役)

淡	阿	公	実	頼	頼	義	時	政
路	波	眺	朝	家	朝	時	政	子
片	中	市	中	市	坂	実	中	中
岡	村	村	村	川	東	川	村	村
我	芝	竹	福	海	三	延	鷹	歌
童	翫	之	助	老	津	若	治	右
		丞		蔵	五		郎	衛
					郎			門

第一幕

寿永二年（一一八三年）暮春の午後。

鎌倉の外れ、飯島崎に近い草地。

林の木に幕をめぐらせ、野天の宴がはじまっている。
春も今日あたりで終りらしく、林の梢からはもうど
んどんと花びらが舞い散っている。

星風ぎの海原は霞が立ちこめ、ねむくなるような薄
声がきこえている。

頼朝の重臣梶原景時、比企能員、和田義盛、三浦義
澄等やお氣に入りの近習が、白拍子の舞を見ている。
いずれも勇ましい流鏑馬姿をしているが、実は遠乗
りを名にして、頼朝が飯島の伏見広綱邸に預けてあ
る愛妾亀の前と隠れ遊びをたのしみにやつて来たの
である。

相模なる

三浦の野べの

ほととぎす

鳴く声きけば

時すぎにけり

舞が終る。

皆、手を打ち褒める。

白拍子達は家臣達の中に坐り、酌をする。

梶原 見事な舞であった。静よりも数段と立派であったぞ。

白拍子一 まあ、お口上手な。おひやかしもよい加減になさ
れませ。

比企 いや、謙遜すまい。あのような事件が起こって、一
躍静の名が高まったが、肝心の舞の方はいま一つであ
った。

梶原 いや、そう言つてやつては可哀想じゃ。いとし殿御
は行方知れず、心も空に舞うていたのじゃ。見事に舞
えるわけがあるまい。

白拍子二 お可哀想な静さま。子を産めば産むで、悲しい噂
が流れるし。

白拍子三 聞いただけでも恐ろしい。生れたみどり児が殺さ
れるなどと。

白拍子四 そんなムゴイお話がござんしょうか。

家臣達（思わず色を為す）

比企 そのようなこと、誰が言った。

白拍子四 静さんの母さまから聞きました。

家臣達 (眼を見合う)

梶原 そんな事は嘘じや。お情け深き殿がそのようなことをなされるわけがないわ。かまえて世迷言を口にするではないぞ。

比企 (話題を替えて) しかし静という奴も相当な代物じやの。幕府のお歴々を前にして、よくもシャアシャアと悠気の歌をうたいおったな。

和田 あれは殿への面当に聞かせおったのじやよ。

三浦 殿と言えば、いったいどこへお出でになったのじやろう。

比企 亀の前どのが貝拾いをしたいと仰せられたので……。

梶原 どこで貝拾いか。もう広綱の屋敷でお貝拾いがはじまつているのではないか。

比企 いかさま。

皆 (わらう)

和田 しかし、御台さまの方は大丈夫じやろうな。もしわかったらたいへんなことになるぞ。

比企 心配するな。この通り勇ましい流鏑馬姿をして出て来たのじや。誰が隠れ館へのお忍びなどと思うものか。

梶原 しかし、殿もお可愛いのう。天下の豪族を統合して大幕府をお築きなされた大將軍が、奥方さまだけに

は、あれほどお氣をお使いなされるのじやから。

比企 と言つて、生来のお色好みはどうにも抑えがたく……。

梶原 コレ。そなたの母者は殿のお乳母どのじや。ゆめにも口を滑らすまいぞ。

比企 そんな比企能員と思うておるのか。白拍子どもと間違うてくれるな。

白拍子一 まあ、ひどい。

白拍子二 おぼえていなされ。

皆 (わらう)

和田 あ、おかえりじや。

皆、威儀を正し、迎える。

老鶯の声。

汀の方から鎌倉幕府の総帥源頼朝(三十七歳)が亀の前を伴つて姿を見せる。

頼朝には太刀持、亀の前には小侍女が従う。

皆 おかえりなされませ。(平伏)

頼朝 よい風じや。亀の前がこのような貝を拾うた。

梶原 変つた貝でござんしょう。(見せる)

梶原 はう。なんという貝で……。

亀の前 殿とわらわの妹背貝。

比企 これは申されました。はは。
（追従的に笑声を和す）

老鶯の声。

頼朝と亀の前、座につく。

頼朝 白拍子。もう舞わぬのか。

白拍子一 舞うてもごらんいただけませぬ。

白拍子二 半ばでお立ちになれますゆえ。

頼朝 これはきつい。政子がうつたような。

亀の前 また御台さまのお名前を。お里心がついたのでござんしょう。

頼朝 うるさいのがまた一人殖えたわ。

皆 （わらう）

頼朝 さあ、のもう。（盆をとる）

白拍子三 こたびは、亀の前さまのお舞を。

白拍子達 おねがい申します。

比企 そうじゃ。われらも拝見いたしとうござる。

梶原 なにとぞ、なにとぞ。

頼朝 わしも見たい。舞うてやれ。

亀の前 では、ほんの一ふし。

亀の前、落花を浴びて、艶っぽく舞う。

源氏山

吹く日吹かぬ日

ありと言えど

わが恋いの日ぞ

あやに愛しき

舞、終る。

皆、世辞を含めて褒める。

伏見広綱が来る。

広綱 申上げます。北條義時どのが、火急の御用にて馳せ

つけられましたが……。

朝頼 なに、義時が。あのボンヤリがどうしてここにいる

ことを嗅ぎつけたのじゃ。

梶原 侍所には流鏑馬の遠乗りと言ってまいったのに。

頼朝 あいつにわかればすぐ姉の政子に伝わる。

比企 そのことにございます。

広綱 （小心を示して）いかが仕りましょう。もし亀の前

さまお匿まいの儀が露頭いたさば、御台さまよりどの

ようなお罰を蒙りますことか。

頼朝 まずいことになったな。

梶原 ともかくもあちらへお移りいただいては。

広綱 左様仕りましょう。

北條義時（二十一歳）が鈍重な風貌でヌウとはいって来る。時政の息子、政子の弟である。

頼朝 お、もうはいって来おつた。

義時 （ノツソリと手をつく）

梶原 忍者の眼には遊びと見せかけ、緊急の合議中じや。

比企 終るまで向うに居られい。

義時 （ムツツリと）こちらも緊急のお使者にございます。

梶原 誰の使者じや。

義時 姉よりの、いえ、御台さまよりの。

頼朝 （思わず）政子に知れたのか、ここにいることが。

義時 ……はあ。

皆 （それは大変だと言った顔を見合わす）

頼朝 どうしてわかった。

義時 侍所にて伺いました。飯島崎まで流鏑馬のお遠乗りと。

頼朝 その通りじや。政子にもそう伝えたのか。

義時 はあ。

頼朝 （ヤレヤレと言った顔で）なぜそれを早く言わぬ。

頼朝 （ヤレヤレと言った顔で）なぜそれを早く言わぬ。

頼朝 （ヤレヤレと言った顔で）なぜそれを早く言わぬ。

梶原 ああ、よかった、よかった。

梶原 とんだ人騒がせじや。はは。

皆 （ともにホツとし、明るくわらう）

頼朝 で、用というのはなんじや。

義時 女どもをお退けくださいませ。

梶原 女ども。亀の前もか。

義時 はあ。

梶原 なんと礼をわきまえぬ。

頼朝 まあよい。行け。

梶原 （眼でなだめる）

講声。

梶原の前、不機嫌な顔で広綱、小侍女とともに上手へ

去る。

白拍子達も重臣に促され、あとにつづく。

頼朝 緊急の用とはなんじや。

義時 静の子供の命乞いをしてまいれと申されました。

頼朝 早耳じやの。誰が耳に入れたのじや。

梶原 畏れながら、唯今も白拍子どもがそのことを口にい

たしおりました。

比企 大分噂が流れおる様子。事を急ぐことが肝要かとぞ

んじます。

頼朝 ……よし。では急ごう。日が暮れ次第、由比ヶ浜よ

り投げ込んでしまえ。

義時 ……はあ。

頼朝 すすまぬ顔じやの。仏ごころがわき出たのか。

義時 いえ、さようなことは。……ただ、姉が、いえ、

御台さまがあつた通り一筋のお方ゆえ、どのようなお騒ぎをおひき起こしあそばすことかと心配致します。

頼朝 痴け。命じられたことをグラつかせるなどと、そのような弱腰でどうする。そちも北條時政の嫡子じや。

親父に学んでもつと腹を強くせい。

義時 ……はあ。

頼朝 早く行つて事を行なつてまいれ。

義時 ……はあ。(立つ)

頼朝 おい。政子には居場所を教えるでないぞ。

義朝 ……はあ。

義時、ノッソリと下手に去る。

頼朝 なにを言つてもはあはあと、まったくぬるま湯のよ
うな男じや。

梶原 なににしてもようございました。

比企 手前共まで胆が冷えました。

頼朝 天下に頼朝の苦手は、後白河法皇と政子の方じや。

梶原 これは。

頼朝 ははは。

皆 (ともにわらう)

頼朝 さあ、館でもう一度のみ直そう。

比企 亀の前さまがお待ち兼ねでございましょう。

皆 (立つ)

花道から信綱が駆けて来る。

信綱 み、御台さまがおわたりにございます。

頼朝 なに、政子が。

皆 えつ。(驚愕する)

信綱 裏道よりおわたりあそばしました。

頼朝 ど、どうしたというのじや。早く亀の前を隠せ。

信綱 は、はい。(急いで去る)

頼朝 酒も隠せ。

家臣達 はつ。(草むらの中に隠す)

頼朝 さあ、流鏑馬じや。弓競べじや。早く弓を持て。矢
をつがえい。

比企 は、はい。なにを的にいたしましたしょう。

頼朝 なんでもよい。放つておればよい。

梶原 あ、海鳥がよい。あれを射競べよう。

比企 そうじや。

皆、勇ましい姿で、虚空に向つて矢を放つ。

花道から頼朝の北の方政子(二十三歳)あでやかな

若妻姿で来る。

乳母淡路の局が万寿（二歳）を抱いてともに来る。

（便宜上、全幕、万寿を頼家で通す）

家臣達、一礼し去る。

静かな濤声。

頼朝 （政子に気がつかぬ風を装い）さあ、今度はあの鳥

じゃ。わしがきつと射落して見せるぞ。（矢を放つ）

政子 お見事でございます。

頼朝 （はじめて気がついたように）おう、御台。来ていたか。

家臣達 （いっせいに平伏する）

政子ら本舞台に来る。

政子 お楽しみのところを。申しわけございませぬ。

頼朝 楽しみではない。武道の修練じゃ。ああ草疲れた。

比企 お疲れにございました。朝からずつの御修練にて。

梶原 スッカリ殿にしてやられました。

頼朝 やっぱり武道はよいのう。（肩を叩く）

頼朝、政子と対い合つて坐す。

梶原 では、われらはあちらにて。

頼朝 （やさしく）わざわざこんな遠くまで、いったいどうしたと言うのじゃ。

政子 やっぱりジカにお願い申した方がと考え直しまして。安養院さまへお虫封じのお詣りの興を伸ばしてまいりました。

頼朝 それはよく来た。頼家、よく来たのう。（頬を指で突く）

頼家 （泣く）

頼朝 これはいけない。よしよし。（あやす）

政子 今日はお姿が変わっておりますから。（淡路に）あちらの、風の当たらない所で。

淡路 はい。

淡路の局、頼家をあやしつつ去る。

濤声。

政子 早速ながら、京都より送られし白拍子静が産み落したるみどり児の、命を断てとのお言いつけが下だりましたそうぞ。

頼朝 誰に聞いた。

政子 静の母人が泣いて命乞いにまいりました。あまりの恐ろしさに、思わず胸が痺れました。いったいそれはまことのことでございますか。

頼朝 ……おまえには嘘は言えぬ。まことじゃ。

政子 なんといい恐ろしいことを。静の子供は義経さまのお子さま。殿にとつても、お血の通うた甥御ではございませぬか。

頼朝 政道のためじゃ。是非もない。

政子 いかにも御政道のためなりとも、一人の女が、いとしき人のタネを宿し、大事に大事にして産む日を待ち焦がれ、やつとの思いで産み落したみどり児を、父なる人に顔も見せず、そのままヤミに消してしまおうなどと、そんな罪深いことがこの世にございましょうか。どうかそのような鬼畜生のようなことはおとりやめくさいませ。この通りおねがい申します。

頼朝 いかにおまえが哀れみを乞おうとも、重臣談合の上定めたことは変改出来ぬ。静の産む子が女ならば、親とともに京へ返そう。不幸にして男である時は、不憫なれども命を奪わん。出産の前にそれは決められていたのじゃ。

政子 なんとというムゴイことを。もし頼家がそのようなめに会ったとしたら、政子は生きておりませぬ。

頼朝 わしも人の親じゃ。それを決めるには腸が千切れそ

うな思いをした。しかし、天下の禍を防ぐためには、どうしてもその非道を行わねばならないのじゃ。おまえも知っている通り、わが父上が武運拙なくお討死なされた時、わしはまだ十三歳の少年じゃった。しかし、清盛はわしを捕えて首をハネようとした。それが世の政道というものなのじゃ。

政子 でも、その時、清盛の母人が泣いて助命を願うてくださったではございませぬか。

頼朝 そうじゃ。お蔭でわしは救われた。しかし、わしを助けたばかりに、平家は滅びてしまうたではないか。

政子 (無言)

頼朝 池の禅尼どのの御恩は、どんなに感謝しても感謝し切れるものではない。しかし、武士として生き残った以上は、わしは父に代つて、平家を滅ぼさねばならなかった。さぞ恩知らずよ、背徳者よと、お憤りなされたであらう。……それが悲しき武士の道なのじゃ。

政子 でも、唯今のお話は宿敵平家の場合でございました。義経さまは殿とともに平家を討ち滅ぼされた弟さまではございませぬか。どうして御兄弟のお子さままでそうなさらねばならないのでございます。

頼朝 ……そのワケはいずれユックリと話してやる。乱世の世は兄弟と雖も敵とせねばならぬ時があるのじゃ。

わしは父上の志を継いで、死物狂いで確立させた武家

政権を奪われたくない。命がけで築き上げた鎌倉幕府を壊されたくない。幕府にとって不利と思う輩は、一人残らずその根を断たねばならぬのじゃ。わが亡きあと、頼家が、安んじて將軍の地位を守って行けるように。……わしはそこまでかんがえているのじゃ。おまえも將軍の御台所さまじゃ。もっと大きく世の中を見る眼を養わねばなるまいぞ。

政子（言葉なくさしうつつ向く）

壽声。

淡路の局が泣いている頼家を連れて来る。

政子 どうしました。

淡路 母君さまがお慰しいようで……。

政子 それは可哀想であつた。ゆるしておくれ。（抱きとつてあやす）はい。母さまですよ。ホーラ、ホーラ、

ホーラ。

淡路 もうお泣きやみあそばして。

頼朝 現金な奴じゃ。

三人 （なごやかにわらう）

花が散ってくる。

頼朝 風が出たようじゃ。もう連れて帰ってやつては。

政子 あなたも御一緒にお帰りくださいますか。

頼朝 帰りたいが、皆の者に修練の講評をしてやらねばならぬ。一ト足先へ帰るがよい。

政子 では、坊や。また輿に乗せて上げましょう。

頼朝 それがよい。お父さまもすぐ帰るぞ。今宵は母のと三人で寝よう。

政子 よかったねえ、坊や。（凝つと頼家の顔を視入る）

頼朝 どうした。

政子 仕合わせな和子の顔を見ていたら……。 （淡路に眼で去れと言う）

淡路の局、去る。

壽声。

政子 ……殿。やっぱり静の子は、たすけてやってくださいませ。

頼朝 なんじゃ、また逆戻りか。

政子 この子の仕合わせ多き行末を思うにつけ、男と生れたばかりに殺されねばならぬ静の子と、あまりにもちがう二人の身の上。この子が果報を取り損なうのではないかと、空恐ろしゅうございます。御政道に口を入れて申しわけございませぬが、静の子を出家させてや